

宮城から、伝えたいこと。

つながれ、どこまでも

Baton

バトン

VOL.

12

FROM MIYAGI

特集

被災地で学ぶこと、 被災地が伝えること

きて・みて

みやぎ生協 東日本大震災学習・資料室(仙台市)

栗駒山麓ジオパークビジターセンター(栗原市)



テーマ:

つながる つなげていく

「みやぎ東日本大震災津波伝承館」では高校生がボランティア解説員として活躍。

あしたのクリエイティブ 石巻市の「Reborn-Art Festival」の現在地

バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

被災地で学ぶこと、被災地が伝えること

特集テーマ

つながる・
つなげていく

14年前のあの日から、「被災地」と呼ばれるようになった宮城県。震災の教訓や復旧・復興の現状を学ぼうと国内外から多くの人が訪れ、今では「災害学習」「防災・減災学習」をテーマとした修学旅行先にもなっています。現地だから体験できること、多感な世代だから感じ、考え、受け止められること。

震災遺構を見学したり語り部の声に耳を傾けたりという経験は、命の尊さを知り、自然災害をじぶんごとと理解して未来を切り開く大切な機会です。

地域に人の営みがある限り、自然災害を完全に防ぐことはできません。私たちにできるのは、命を守るために、そして被災してもなるべく早く暮らしを立て直せるように、備えること。それには震災の経験と教訓を次の世代に向けて伝えることが大切です。

県内にはすでに多くの震災遺構や伝承施設が開設され、さまざまな団体・個人が震災の記憶の継承や防災・減災のための活動に取り組んでいます。そんな遺構や施設を訪ねる修学旅行（教育旅行）を継続しているのが、愛知県愛西市の6つの中学校。同市は南海トラフ地震の被害が想定されるだけに、過去の被災の爪痕を自分の目で見、被災した人の生の声を聴くという直接的な体験を重視した災害学習プログラムを組み立てています。市を挙げてのこの事業は、地域の未来を担う生徒たちの感受性を揺さぶり、防災・減災への意識を高める大きな機会となっているようです。

また、そういった方たちを受け入れる側としても、次世代の語り部たちが3・11を学び、どう伝えていくかを考える取り組みが少しずつ進んでいます。これからも日本各地で起こりうる災害で一人でも多くの人が命を救えるよう、宮城県の経験と教訓を伝えたいという思いが若者たちに受け継がれています。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館では、地元の高校生たちが語り部を行っている。50名ほどの学生が語り部ガイドに登録している。

愛知県愛西市の中学生、 修学旅行は被災地へ

多感な時期に、
五感で実体験を

愛知県愛西市では中学校全6校が東日本大震災の被災地を訪ねる3泊4日の修学旅行(中学生体験学習事業)を2023年から行っています。2回目となる2024年は3年生計531人と引率教諭など53名が参加。一泊約200名の3班に分かれ、岩手県平泉町の中尊寺を経て気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、石巻南浜津波復興祈念公園、石巻市震災遺構 門脇小学校を訪れ、語り部や公益社団法人3・11メモリアルネットワーク(旧3・11みらいサポーター)の武田真一代表理事のお話を聞くなどの濃密なプログラムを体験しました。

実は愛知県の中学校の修学旅行には2泊3日、行き先は関東までという内規がありました。それより1日多く移動距離の長い東北への旅行を実現したのは、日永貴章市長や構想当時の市教育委員会教育長の確かな思いがあったとのこと。関東への修学旅行の場合、費用は保護者負担ですが、愛西市では市事業を抱き合わせることで、費用を市が負担し、保護者負担の軽減につながりました。

日永市長はその取り組みについてこう説明します。「いまの子どもたちを取り巻く状況は私たちの子ども時代とはまったく異なります。せっかくの修学旅行ですから、家族や友達との旅行ではなかなか目的地に選ばない場所で直接

的な体験をさせてあげたいと考えました。ちょうど新型コロナウイルスの感染拡大やIGAスクール構想の実現に向けた取り組みによって、学びのあり方が大きく変わった時期です。最も気になったのは、子どもたちは自分専用のタブレット端末で瞬時にバーチャルな空間や情報に触れることができる一方で、も

のごとを実際に体験するというその時期にしかできないチャンスが大幅に減っていました。そこで2021年に中学生体験学習事業検討委員会を設置して協議を重ね、東日本大震災の被災地を訪ねて被災された方の生の声に触れる災害学習の旅をスタートさせました。5年間継続予定の市の事業です。

市教育委員会としても、五感をもって「ひと」や「もの」、「実社会」といった対象と向き合い、直接体験することで身近な暮らしや広い世界への興味、関心、意欲を高めてほしいという方針を掲げていました。修学旅行には、実際にその場に足を運んで被災地や現代社会が抱える問題を知り、さらには自分の暮らし地域に潜む足元の問題にも気づくことができるという大きな意義があるのです。

そう、重要なのは実体験を伴う「本物との出会い」。沖縄や広島での平和学習といった候補のなかから東北行きを選んだ背景には、愛西市ならではの防災教育の意識の高まりもありました。

南海トラフ地震に 向けた防災教育

愛知県北西部を含む濃尾平野は古くから川の氾濫に苦しめられてきました。なかでも愛西市は海抜ゼロメートル以下の土地が多く、1959年の伊勢湾台風では浸水被害も経験しています。しかし、甚大な被害を受けた教訓が語り継がれている隣の弥富市や飛鳥村に比べて、伝承の温度はそう高くないというのが実情です。小学校の社会科副読本

で紹介されていますが、1976年の台風17号以来大きな自然災害がないこともあり、被災の記憶の風化は否めません。

東日本大震災の発生当日、愛西市では議会が開会中でした。いったん大きな揺れに議会はいったん中断し、やがて再開。日永市長は「帰宅後にテレビで津波の様子を目にして、これは現実起きたことなのだろうかと言葉もありませんでした」と回想します。その後は市長自身も東北の被災地を視察に訪れており、福島県広野町や三春町に応援職員を派遣しました。もちろん個人的に被災地にボランティアに訪れた職員も少なくありません。

そんな愛西市はいま、南海トラフ地震が発生した場合に深刻な液状化が懸念されるといふ現実に向き合っています。県と連携して防災対策を進め、2024年11月17日には市と県合同の津波・地震防災訓練を佐屋中学校で行いました。防災対策を進めるうえではハ



「3.11メモリアルネットワーク」
武田代表理事とのワークショップで、自分たちが感じたことを話し合う時間も



2024/06/05



2024/06/05

右巻市や気仙沼市で、実際に津波被害に遭われた方々のエピソードを聞きながら展示を見ることで、災害の怖さを実感

修学旅行の思い出

東北で学んだこと

震災学習1日目は、向洋高校旧校舎で実際に地震や津波の被害にあった校舎の中を見学しました。おそつてきた津波は校舎の3階にまでおよびました。3階の校舎の中には、近隣の工場の断熱材が瓦礫と共に入っていました。今までは映像などしか見たことのなかった被災地を生で見た時は、とても衝撃的で津波の恐ろしさを改めて実感しました。2日目は、佐藤愛梨さんという当時6歳だった女の子のお母さんのお話を聞きました。愛梨さんが残してくれた遺品から、「命を大切にしてください。」というメッセージを受け取りました。ワークショップでは、命の大切さについて深く学びました。自分が助かる人と人を助ける側になれる、人の命を救える、被災後の地域や人々を支えるチカラになります。東北で学んだことを忘れずに、自分や他の人の命を大切に思っていていこうと思いました。右の写真は海の潮吹きの様子です。初めて見て興味深かったです。



修学旅行の思い出

東北で学んだこと

・気仙沼 伝承館 私は地震に対する恐怖を持っていましたが、揺れに気をつけられなくなるとかと思っていました。しかし、それは勘違いだと思わされたのです。東日本大震災では、震度7の揺れで停電が起きました。その後学校の3階の天井まで津波がきたそうです。どんな家も、車も、人までもが黒い津波によって流されたのです。さらに、津波を免れた人々に追い打ちをかけるように火事が起きました。地震の怖さは、揺れだけではないと知りました。

・伝承交流施設MEET門脇 特に印象的だったのは、「地震が起きた後、丘の上にある幼稚園から子供たちを親に返すため丘を降り、津波の巻き寄せになった」と言う話です。聞いたとき私は「なんで？」と思いました。「大きな地震が起きたら津波が来るかもしれない、と思うはずなのに。」私たちはこの悲劇が二度と起きないようにしなければいけません。そして、生きたくても生きられなかった命があることを絶対に忘れません。

・生活に生かすこと 気仙沼市に建てられているある石碑には、こう書かれています。「大地がゆれたらすぐ逃げろ より速くへ より高台へ」もし私たちが住む愛西市で大地震が起きたら、津波がさかのぼって来る可能性のある善太川や日光川から離れた避難場所(コミュニティセンター)にすぐに逃げようと思いました。また、道路が渋滞するため徒歩で移動したり、近所の人に声をかけたりすることを忘れないよう注意します。



中学生たちがまとめた修学旅行のレポートから一部抜粋。宮城で被災地を巡ったことにより、「もし自分たちの町に災害が起きたら」といふふんと化して考えることにつながっている

日永市長は「実際に訪れてみて宮城県のみなさんの防災意識の高さやその発信の仕方に感心しました。顧みて、一般的には災害などの非常時には行政や自分ではない誰かが助けてくれるものと思ってい

た。こうした災害学習を体験した子どもたちが大人になって支えるまちは、仮に被災しても必ず再び立ち上がる地域力をつけているのではないのでしょうか。そう期待しています」と話します。

宮城の経験と文化を伝える機会に

日永市長も河野教育長も口々に「宮城県の対応は期待

以上に手厚い。学びの面以外でも、温かいもてなしが嬉しかった」と語ります。愛西市の一行を受け入れたのは、「南三陸ホテル観洋」と仙台市青葉区の「La楽リゾートホテルグリーングリーン」。「食事にしてもお風呂にしても十分な配慮をいただき、スタッフの方たちの対応もとても温かいものでした。東北の方たちの思いをダイレクトに感じ

「修学旅行を通して有意義な防災学習につながれば」と日永市長(写真右)



ード面だけでなくソフト面での対策、つまり防災教育が大きな鍵を握ります。中学生体験学習事業検討委員会においても、地域の次代を担う世代が災害に関する直接的な体験をすることは、被災をじぶんととしてとらえ、ひいては郷土愛を育む効果もあるという声があがりました。それが

委員共通の認識となつて、東北への旅程が決定されたのです。

旅行に同行した河野正輝教育長は、「被害の写真や映像、お話しにショックを受けた様子の生徒もいましたし、感想文に「自分の目で見て、一瞬で心の底から怖いと思った」と書いた生徒もいるなど、それぞれに心に刺さる体験となつたようです」と語ります。「例えば気仙沼市東日本大震災遺

愛西市から修学旅行の計画について相談を受けてから、宮城県も協力を惜しみませんでした。被災地への理解を深めてもらうことを目的に、各地にある震災遺構はもちろん、護岸工事の進んだ海岸、更地、新設された施設や復興商店街などさまざまな情報を提供しました。

河野教育長は「まず震災遺構がたくさんあることに驚き



修学旅行を終えた中学生たちのコメントからは、実際に現地を見て、現地で話を聞くことの大切さが伝わっている

り、被災された人の体験を聞いたこと、震災の恐ろしさをあらためて強く感じた」「命の大切さを学ぶことができた」というもの。ほかにも、「貴重な体験の機会を与えてくれて感謝している」「学んだことを活かして地域の防災に役立てたい」という声もありました。

そこに表示されているのは、体験したことを自分ごととして真剣に受け止め、同じ悲劇が二度と起こらないようにするために自分は何をすべきか、何ができるのかという彼ら彼女らなりの意識の変化。さらに体験した内容を家族と共有し、避難場所の確認や防災グッズについて話し合うなど、共助の意識の高まりと浸透をうかがうこともできます。

愛西市から修学旅行の計画について相談を受けてから、宮城県も協力を惜しみませんでした。被災地への理解を深めてもらうことを目的に、各地にある震災遺構はもちろん、護岸工事の進んだ海岸、更地、新設された施設や復興商店街などさまざまな情報を提供しました。

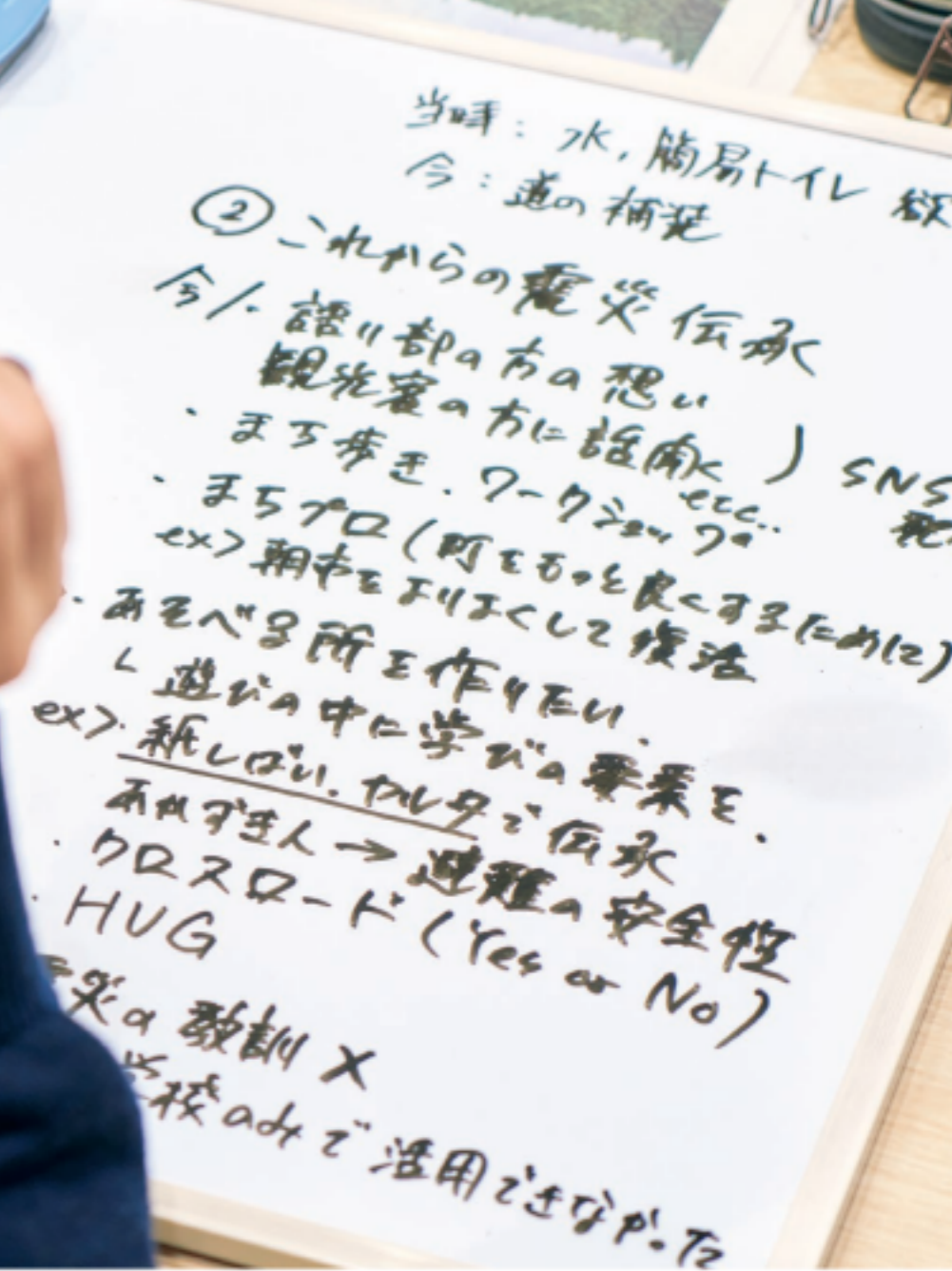
河野教育長は「まず震災遺構がたくさんあることに驚き

見ながら、震災の爪痕と復興の底力となったすべての場所を巡りたいと思ったほどです。限られた時間に合わせて選ばせていただいたのが、大きな被害を受けながら大変なご苦労のなかで復興した気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と石巻の伝承交流施設「伝承館」門脇でした。とくに語り部の方から直接お聞きする生の言葉は子どもたちにとって得難い体験です」と語ります。

話題とするだけで、東北の被災地や自分たちの防災について関心を持つ人が増えます。身近な人に伝えることはまさに伝承の第一歩。宮城が14年前に東日本大震災で経験した苦難と希望、そして教訓を、これから災害を経験するかもしれない他の地域に伝えることは、そのまま防災・減災につながります。

そしてできれば、宮城を訪れた人々には、防災・減災のノウハウを持ち帰るだけでなく、風土に根付く暮らしや文化も感じてほしい。何気ない日常の大切さや尊さに気づきつけられたいという願いが、宮城の願いです。

中高生たちが考える、 この伝えかた



2024年12月から2025年1月にかけて全3回実施された「みやぎ中学生・高校生震災伝承プロジェクト」。県内で震災伝承に関わる中高生が同世代の活動を見学し、彼らの視点でこれからの震災伝承について議論を行う研修会でした。企画したのは、みやぎ東日本大震災津波伝承館でボランティア解説員として活動する高校生の西城遼斗さん。発災当時は幼く、11の記憶がほぼない彼らが、どのような交流をし、今後の伝承活動を考えているのか。西城さんに、プロジェクトを振り返りながら聞いてみました。



みやぎ東日本大震災津波伝承館
ボランティア解説員
西城遼斗さん

石巻市にある「みやぎ東日本大震災津波伝承館」でボランティア解説員として活動する西城さん。防災士と宮城県防災指導員の有資格者。防災の大切さを伝える活動にも興味を持ち、高校1年生の時にボランティア解説員に応募した。自宅のある宮谷市から石巻市まで毎月1、2回通い、解説を行っている。

全3回の研修会を終えた感想をお聞かせください。まずは第1回目について、場所は「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」で、被災の痕跡を残す建築物（震災遺構）という特徴がありました。

プロジェクト初回ということもあり、順調にプログラムが進むだろうか、現地の中高生とうまく交流できるだろうかなど、不安でいっぱいでした。でも、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（以下、気仙沼伝承館）のみなさんの親切な対応で、リラクゼーションを進めることができました。気仙沼伝承館の活動を見学するのは、私は初めてで、遺構の解説は視覚的にも印象に残りました。後半のワークショップでは、テーマに加え、気仙沼のことや学校での避難訓練の様子、語り部活動についても教えていただきました。各班の発表の際、気仙沼の方が「伝承者を増やすには『かっこいい』と思わせることが必要」と言っていたのが今でも心に残っています。今回の交流を大切に、関係性を

第2回目は、「宮城県多賀城高等学校」の災害科学科が行っている「津波伝承まち歩き」を体験されましたね。午後は石川県の高校生との交流もありました。

まち歩きは、多賀城高校災害科学科の方々が多賀城市内の津波被害があった場所を案内するという内容で、みなさんが端末も使いながら詳しく解説する姿に驚きました。第1回に続き私が活動している伝承館とは異なる伝承方法が、これからの自分自身の活動にとって勉強になるものでした。午後のワークショップでは、石川県立輪島高等学校の方々とオンラインでつなぎ、さまざまな意見交換ができました。被害の状況も、復興の様子も宮城とは異なるので、輪島高校のみなさんのリアルな声は新しい気づきになりました。また、多賀城高校のみなさんが幅広い視点から意見をしていたのが印象的でした。日頃から防災・伝承に関わるさまざまなイベントに参加し

研究をされている経験が、とても活かされていると感じました。防災・伝承活動に勝ち負けはありませんが、私も多賀城高校さんの素晴らしい活動に置いてかれないようにと刺激になりました。

第3回目は、西城さんが活動する「みやぎ東日本大震災津波伝承館」が会場でした。普段の解説の様子を見てもらう機会でした。当館の参加可能なボランティア解説員が全員集合し、気仙沼伝承館から参加いただいた2名に当館の展示を紹介しました。双方で、お互いの伝承活動を共有できたと思います。ワークショップでは、研修会最終回でもあったため、これまでのまとめのような意見交換をしました。これからやってみたいことについて、具体的には「伝承館にマスコットを作る」「子どもも来やすいよう子ども専用スペースをつくり震災・防災について知ってもらう」などが挙がりました。東北大学の佐藤翔輔先生からは、「ここで出た意

第1回 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

〈右〉気仙沼伝承館の高校生語り部が遺構をガイド。見てほしいポイントが順番に説明されていた。〈左上〉会の冒頭ではちょっとしたゲームがあり、お互い打ち解けた雰囲気。〈左下〉どうやら震災伝承者を増やせるか、どのグループも活発な意見が飛び交った。



みやぎ東日本大震災津波伝承館



〈上〉みやぎ東日本大震災津波伝承館のボランティア解説員による解説を受ける（下左）これまでの回を経て様々な伝承のスタイルを知った参加者、これからの伝承についてもアイデアが膨らむ。（下右）宮城県復興支援・伝承課からも「中高生の柔軟な意見がたくさん出てとても有意義なプロジェクトだった」と評価が

ボランティア解説員になる前は、現場（被災地）の雰囲気や震災伝承が抱えている課題を感じることがありませんでした。しかし、解説員に認定され活動が増えていくたびに、現場の雰囲気や課題をじぶんごととして感じるようになりました。震災伝承活動には、多くの人の想いが詰まっています。震災のことについて語りたくない方、語れない方、皆さんの想いを決して忘れることなく、これからも伝承者として携わっていきます。

——西郷さんは、ボランティアガイドの経験を通じて、どのような変化がご自身にありましたか？

来館者に伝えていきます（アウトプット）。解説員や語り部応募に一步踏み出せない方は、実際に伝承施設を訪れて、語り部活動をする学生たちの話を聞いてみるといいかもしれません。私たちは、より多くの中高生が伝承活動の一員になってくれることをとても楽しみにしています！

東日本大震災の発生から時間が経つにつれて、当時の記憶や教訓の風化は避けられ、できない課題だと感じます。しかし、このまま風化が続くと、今後発生する災害から自分の命、大切な人の命を守ることができなくなってしまう。東日本大震災から得た教訓に無駄なことはありません。特に伝承活動が活発に行われている宮城県だからこそ、同じような悲しみと混乱を繰り返さないために、震災の記憶と教訓を永く後世に語り継ぐことが大切だと思います。そのために、私たちも先輩方から伝承のバトンを受けとり、次の世代へしっかりと渡していきたいと思っています。

——被災地である宮城県として伝えるべきこと・忘れてはいけないと感じることは、どんなことでしょうか？

——どのような手ごたえがあったでしょうか？

全ての研修会に当ってはまるごとですが、中学生・高校生という同じ年代だからこそ、みんな楽しそうに交流できていたのがいちばん嬉しかったです。実際に、研修会終了後に「楽しかった！」「や、またこんなイベントがあったらいいな」という声も聞かれました。

——研修会全体を通して、どのような感想をお持ちですか？

県内の学生伝承者と出会えて交流できたことがいちばん嬉しかったです。このプロジェクトを企画して良かったなと思いました。参加者それぞれにとって、これからの伝承活動の励みにも自信にも繋がったと思います。手探り状態での実施でしたが、初回としては大成功だったと思っています。

呼んでください！という声もたくさんいただきました。また、「同じ学生で震災伝承活動をしている人に会えて、心強く思った。自信につながった」という声もいただきました。私も含め、自分たちがこれまでやってきたこと、頑張ってきたことが間違っていないか、励みになった機会だったと感じます。

——逆に、今後の課題だと感じたこともありますか？

やはり「伝承者同士の交流が少ない」という課題を感じました。この課題は、宮城県内での交流が少ないということもあり、みやぎ東日本大震災津波伝承館のボランティア解説員同士の交流も実は少なかったという気づきでもあります。後者は、さっそく交流の場を作ろうと企画を始めたところです。また、今回のプロジェクトは「県内の中学生・高校生」に限ってしまったこと、募集対象を「現在震災伝承活動をしている学生」としてしまったことで、参加者を狭めてしまったとい

う反省もあります。次に開催する際は、募集をより広範囲かつ年代を広げてのプロジェクトにできれば、さらに充実した機会にできると感じています。また、課題について意見交換するだけで終わるのはもったいないので、解決のアクションまでつなげられるようなプログラムにできればより充実すると思っています。

——これからボランティアガイドや語り部活動に参加したいと思う中高生に、メッセージやアドバイスをお願いいたします。

「自分は震災を経験していない」とや「震災当時の記憶はない・少ないから伝えられない」などの理由で躊躇する方もいるかもしれません。自分もそうでした。でも、伝承活動をするにあたって必要な資格はありません。このプロジェクトを通して感じたのは、中学生や高校生は震災の記憶がない人がほとんどです。しかし、知らないことを自ら積極的に学び（インプット）、そこで得た学びを自分自身の言葉で

（右）多賀城高校が各所に設置した津波到達プレート。まもの高校津波津波の津波の津波を知ることができた。（左上）タブレットも活用したガイドでは、当時の映像なども流しながら、その場所の被害を把握。（左下）ワークショップでは、被災地高校の生徒もオンラインで参加、現状の課題、何を伝えたいかなどを話し合う。

第2回
宮城県多賀城高等学校

暮らしを守るために 助け合った軌跡

東日本大震災を忘れないために。そして、あの日からの歩みを後世に伝えるために。その責務のために設置されたこの資料室は、被災の痕跡をデータと多数の写真で展示。さらに、地域と生活者の日常を支えるために奔走したみやぎ生協の取組みについて発信する場所です。阪神・淡路大震災をはじめ全国各地で発生した災害から教訓を得て今につながっているという物資の支援、人と人がつながる場づくり、再起を目指す事業の支援などの様子からは、発災から14年間で成し遂げられた再興の過程と、何気ない日常を過ごせることの尊さが伝わります。

〈上右〉資料室の外には、震災当日の夜に河北新報社が出した号外やその後数日間の新聞を掲示。当時の緊迫した空気を伝える。〈上左〉被災地を巡るツアーの一部として行われた防災講座。この日はローリングストックの仕組みを通じて備えることの重要性を呼びかけていた。

施設①

キーワード ▶ ☐津波被害を知る ☐証言を聞く ☐避難を考える ☐復興を感じる

みやぎ生協 東日本大震災学習・資料室



館内にある大きな柱には沿岸部で観測された津波の高さを表示。その巨大な規模を体感することができる。

自然災害の恐ろしさを伝える被災写真の数々。見る人の心に、更なる防災意識を呼び起こす。



DATA ◎仙台市泉区八乙女4-2-2(文化会館ウイズ1階) ☎022-374-8531 ●10:00～17:00 毎週日曜日、祝日、お盆、年末年始 **※無料** 🌐https://www.miyagi.coop/outline/shien/study_data/

問 私たちの快適な生活に欠かせない「地域インフラ」について書き出してみよう。

答



シアタールームでは、発災後の混乱の中、店舗での販売と宅配で地域の人々を支えたみやぎ生協の取組みを映像で伝える。

「展示室2」の床一面に栗原市の航空写真が敷かれ、栗駒山から平野部までの丘陵や地形の変化を俯瞰してみることができる



施設②

キーワード ▶ ☐山地災害を知る ☐防災を学ぶ ☐自然との共生を学ぶ

栗駒山麓ジオパーク ビジターセンター



「展示室3 自然の驚異と防災」では、岩手・宮城内陸地震発生時の状況や、専門家による解説を観ることができる



地すべりで大地がどのくらい動いたかを解説する仕掛け展示。人間や車との対比が描かれ、その規模を体感できる



〈上〉廃校を活用したこの施設ならではの、大画面シアター。壁と床の2画面で、床面には靴を脱いで上がることができ、栗原の雄大な景色との一体感を味わえる
〈下〉取材時は雲がなく、くっきりと見えた栗駒山。古くから、この山の雪解け具合を見て田植の準備を行うなど、人の営みと共にある山。

問 岩手・宮城内陸地震によって起こった荒砥沢地すべりで、大地はどのくらい動いたでしょう。

答



DATA ◎宮城県栗原市栗駒松倉東貴船5番地 ☎0228-24-8836 ●9:00～17:00(3月～11月、12月～2月は16:00まで) 🔥火曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始(12/29～1/3) **※無料** 🌐<https://www.kuriharacity.jp/geopark/>



vol.12

石巻市の

Reborn-Art Festivalの現在地

リボーン アート フェスティバル

当初から変わらず
原点に立ち続ける

2017年から宮城県石巻市を中心に開催されている、アート・食・音楽による総合芸術祭「Reborn-Art Festival（リボーンアートフェスティバル）」（以下：RAF）。音楽プロデューサーである小林武史氏が実行委員長を務めます。アートでは国内外のアーティストによる作品展示やワークショップを、食では様々な料理人たちが手がける地元食材を活かした食の提供を、音楽では著名なミュージシャンたちによる音楽ライブを行い、東日本大震災の被災地である石巻にたくさんの人々を呼び込んできました。

「RAF実行委員会を立ち上げたのは2015年。アートフェスを通じてたくさんの人に被災地に来てもらいたいと

いう思いを柱にしていますが、決して打ち上げ花火のような一時的なものを目指してはいません。私たちの目的は、地域の復興や振興につながる持続的な「循環」を作り出すこと。これが、設立当初から一貫して大事にしているコンセプトです」と話すのは、RAF実行委員会事務局長である松村豪太さん。2017年には食害など課題にもなっている鹿の解体処理施設を設立・運営し、最近では未利用魚や鹿肉など石巻ならではの食材を活かした料理を提供する飲食店を始動させましたが、コンセプトは同じ。発災から14年が経った今もその指針を原点に、様々な視点から地域の価値を見出そうと活動を続けています。

地域に価値を見出すためにはどんな行動をすべきなのか。松村さんはここ数年で、その

からも大事にしていきたいと思っています」

石巻に芽生える
有形無形の「レガシー」

「わからないこと」
にこそ取り組む

の食材を使って商品開発をすることもそう。アウトプットとしてはまだ手探り状態ですが、ようやく定期的な活動が見えてきたところです」

観る者に感動や幸福感をもたらす一方で、アートは時に

「わからないさ」や「難しさ」を感じさせるものでもあります。難解だからこそ暴力的に感じる人も、眉をひそめる人たちがいるのも事実。それでも「地

域を見つめ、地元の人たちと対話を重ね、地道に活動を続けることが大切」だと松村さんは語ります。

「誰にでもわかりやすいものは課題解決を論理的かつ合理的に考えることができますが、それを突き詰めるだけでは豊かさは実りにくいと思うのです。つまり、無駄なものさえも大事にする余裕や価値観がないと、地方に人は呼び込めないのではないかと。アートを大事にするローカルだったら私も行ってみたい」と思う人たちはきっといるはず。RAFではそうした考えをこれ

「誰にでもわかりやすいものは課題解決を論理的かつ合理的に考えることができますが、それを突き詰めるだけでは豊かさは実りにくいと思うのです。つまり、無駄なものさえも大事にする余裕や価値観がないと、地方に人は呼び込めないのではないかと。アートを大事にするローカルだったら私も行ってみたい」と思う人たちはきっといるはず。RAFではそうした考えをこれ



「世界で一番面白い街を作ろう」を合言葉に、石巻を刷新しようと取り組むプロジェクトチーム・ISHINOMAKI 2.0。松村さんはその代表理事も務めている。「2011年の設立から石巻に思いを抱いている人の声を拾い続けてきました。そのアプローチはRAFでも大切にしています」

RAF本祭における地域食材を活かした料理



食を巡る体験企画「フードアドベンチャー」



これまでに開催された芸術祭は、それぞれ記録集にまとめられている。アート・音楽・食を通じて石巻に向き合った多様な作家たちの表現が鮮やかに伝わる。

答えが見え始めてきたといいます。「これまで取り組んできた食に関する活動も答えのひとつですが、地域の価値になる素材は様々な方法で扱えるのではないかと思うようになりました。語り部のような伝承の手法は、地域の方がコンテツを提供するサステナブルツーリズムにもなり得ますし、地元の料理人たちと石巻

地域の方たちと協働して盆踊りをRAF的に再構築した「リボーン祭り」



RAFを象徴する常設作品『White Deer (Oshika)』（名和晃平）



地震・津波への備えを考えてみよう

宮城県第五次地震被害想定調査の概要と防災対策

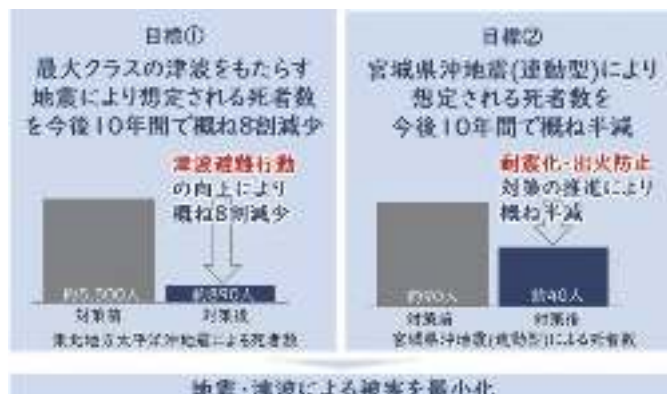
第五次地震被害想定調査

県では、今後起こりうる地震による被害の全体像を明らかにし、県全体の防災対策の基礎とするため、具体的な被害を算定する被害想定（宮城県第五次地震被害想定調査）を行い、それを元に右のとおり今後10年の減災目標を設定しました。

今回の調査では、県民の皆さんによる一人ひとりの防災対策によって、被害を大きく軽減できることが分かりました。

県では、県民の皆さんの防災意識向上や防災対策に関する普及・啓発活動などの対策を行っています。

皆さんもできることから地震・津波への備えを始めましょう。



地震火災にも注意を

地震により発生する火災の半数以上は電気によるものと言われています。（日本火災学会誌「2011年東日本大震災 火災等調査報告書」）

また、令和6年能登半島地震で発生した大規模火災も電気が原因と推測されています（調査継続中）。

電気火災の抑制に有効なのが「**感震ブレーカー**」です。設定された以上の揺れを感知した時に電気を自動的に止める器具で、地震の直後や停電から回復した時の電気火災を抑える効果があります。

安価な「簡易タイプ」の場合、家電量販店などで数千円で購入できますので、設置を検討してみましょう。

主な感震ブレーカーの種類



出所：内閣府、消防庁、経済産業省 感震ブレーカー等の普及啓発用チラシ

【注意事項】●感震ブレーカーを設置する場合は、急に電気が止まっても困らないような対策と合わせて取り組む必要があります。●生命の維持に直結するような医療用機器（人工呼吸器など）を設置している場合は、バッテリー等を準備してください。（または、電気を止める器具を選択できるコンセントタイプの使用を検討してください。）●夜間に停電した時のために、停電時に作動する足元灯や、懐中電灯などの照明器具を常備しましょう。

「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が発信されたら、ワンランクアップの備えを。

巨大地震が発生した後、北海道・三陸沖で続いて大きな地震（後発地震）が発生する可能性が通常時よりも高まった場合、「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が発信されます。

この情報が発信された場合、日頃からの備えの再確認を行うなどのワンランクアップの防災対応を行いましょう。

※呼びかけの内容は、令和6年8月に初めて発表された「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」と同じような内容になります。

北海道・三陸沖後発地震注意情報が発信された場合の対応例

- 日頃の備えの再確認
- 緊急情報の取得体制の確保
- すぐに避難できる態勢での就寝
- 非常持出品の常時携帯
- 先に起きた地震（先発地震）による被害箇所の確認・注意

日頃からの備えが一番大切！



出所：内閣府、気象庁 北海道・三陸沖後発地震注意情報啓発用リーフレット



宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています！
皆さまからの投稿も
お待ちしております！



LINE



Facebook



X (Twitter)



Instagram